

インクの魔法

書道の本、などを先に言わない方がいかもしれない。気鋭の書家・金子祥代さんの初著作「インクの魔法」は、不思議な味わいの短い物語四編と、ポップな墨象作品を取めたアートブック。先入観は一切持たず、まずは手に取ってみてほしい。

コンセプトは「墨の絵本」。分厚く堅牢な表紙つきの厚紙製、余白たっぷりの自由な紙面構成は、確かにページをめぐること自体のうれしさを思い出させる。書道展に来る人なんて一部で本ならみんな読むでしょう。もっと普通の人に書の良いさを知ってほしいと金子さん。

金子 祥代さん

かねこ・さちよ 東京都出身。7歳から書道を始める。津田塾大学芸学部卒。芦屋書道くらぶ主宰。神戸市在住。

著者に聞く

墨の魅力伝えたい



「絵本なので悪人は出てこないし、ちゃんとハッピーエンドになってます」と話す金子さん―大阪市内

場人物が話すのを聞き取るように書いた。自分でも思いがけない結末を迎えた話もありますね」

そして最後が「フレンス」。一人て画廊を営む「マダムM」と若きアーティストの交流を描いた。「ただひとつだけ覚悟しなくては捨てること。Mのせりふは、著者自身の芸術観が込められているという。

「Mには表在のモデルがいる。彼女は『commitment』という言葉を使ったんだけど、これには『献身』という意味がある。一つのためにすべてを捨ててささげる。書の道に生きていく私にとって大事な言葉です」

本書のもう一人の主人公が書作品。驚くべき鮮烈な印象は、墨色の濃淡と線のリズムによるもので、

一部に金粉を加えたくらい。イラストと見まがう愛らしい彫絵も自ら彫った篆刻作品で、すべて古来の書道の技法にこだわった。

墨は「いつまでもミステリアスで魅力的な生き物」という金子さん。「まだまだ成長過程にある自分のすべてを出し切って書いた。書と物語の両方合わせて、これが今の『私』です」

(平松正子・文化生活部)
「インクの魔法」は幻冬舎ルネッサンス刊・二九四〇円